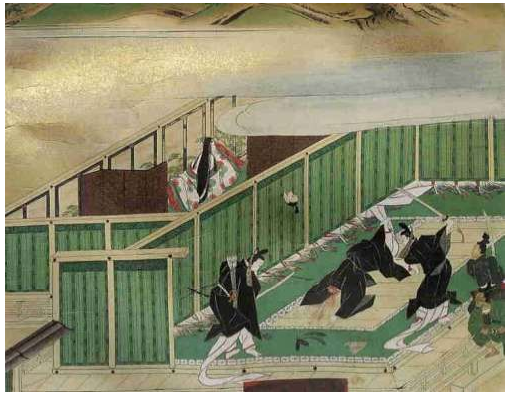
茜色の歌姫

第一部　乙巳の変

戊申に、天皇大極殿にに御ます。古人大兄侍り。中臣鎌子連、蘇我入鹿臣の、人と為り疑い多くして、昼夜剣持けることを知りて、俳優に教へて、方便り解かしむ。入鹿臣、咲ひて剣を解く。入りて座に侍り。（中略）中大兄、子麻呂等の、入鹿が威に畏れて、便旋ひて進まざるを見て曰わく、「咄嗟」とのたまふ。即ち、子麻呂等と共に、出其不意、剣を以て入鹿が頭肩を傷り割ふ。入鹿、御座に転び就き



多武峰縁起絵巻

て、叩頭みて曰さく、「当に嗣位に居ますべきは、天子なり。臣、罪を知らず。乞ふ、垂審察へ」とまうす。天皇大きに驚きて、中大兄に詔して曰はく、「知らず、作る所、何事有えりつるや」。中大兄、地に伏して奏して曰さく、「鞍作、天宗を尽し滅ぼして、日位を傾けむとす。豈天孫を以て鞍作に代えむや」とまうす。天皇、即ち起（た）ちて殿の中に入りたまふ。佐伯連子麻呂、稚犬養連網田、入鹿臣を斬りつ。是の日に、雨下りて潦水庭に溢めり。席障子を以て、鞍作が屍に覆ふ。（『日本書紀』巻第二十四）

第一章　伊勢の乙女

643

伊勢は、かつて国栖と呼ばれた。

大和の国の都のある飛鳥より南へ、険しい山々を越え、海に到る地に、かつては王をいただく国があった。

今は大和の版図の内にあり、海部の一族が宰領する地であった。人々は、海にもぐって魚貝を漁し、山に分け入って果実を採り、コメはわずかな平地に開けた田よりわずかしか取れず、口にするのは海部の一族のみであった。

海部の長の家、大和の大王家の皇子がいます……。

その名を大海人皇子と言った。

飛鳥より陸路を数日かかる伊勢に、大和の大王家の皇子が、なにゆえにいますや。

十二歳の大海人皇子については、伊勢の人々は密やかにこう語り伝えていた。

皇子が生まれる十月前、飛鳥の都より宮拠人が来たり、海部の乙女とまぐわった。宮拠人が飛鳥に戻りて後、乙女は懐妊した。その子が産まれる頃、飛鳥で内乱が起こり、かの宮拠人は軍を起こして大王の御位に即いた。やがて飛鳥より大王の御使が伊勢に到り、生まれたばかりの子に、皇子の名を捧げた……。

だが、皇子の名を授けられても、その子が十二となるまでに、飛鳥に呼ばれることもなく、海

部の家にて、ただ敬われて育った。幼き頃は、海部の子らとともに、海に山に遊んだ。しかし、やがて己が、海部の血を受けた子ではなく、かと言って、飛鳥の都では、忘れ去られたすたれ皇子でしかないことを覚えた頃より、気質は寂しげに陰鬱になり、ふさぎがちな日々を送っている。

海部の長の長子は、名を小楯（おだて）といい、大海人皇子より二歳上。十三で浜の漁人の乙女とまぐわい、十四で三人の妾（め）を抱えていた。背丈高く、筋骨たくましく、常に同じ年かさの下部を随（したが）え、野に山に浜に駈け、乱暴を働き、乙女を抱いた。

「皇子よ」

ある春の日、海部の家に戻った小楯は、門前の草むらに舞う二匹の蝶々をぼうっと眺めていた皇子に、磊落に声をかけた。

「その蝶々は、何をしているか、皇子は知りたまうか」

皇子は、色黒い貌に大きな眼を輝かせる小楯を見上げ、ただ首を振った。

「雄と雌がまぐわっている」

まぐわう、と聞いて貌を赤らめ俯く皇子の傍らに坐し、小楯は誇らしげな笑みを浮かべて続けた。

「人も、獣も虫も、男（をのこ）と女（をみな）がまぐわい、子をなす。皇子は、女とまぐわいたもうたことはあるか」

皇子は身を固くし、応えなかった。

「さきほど、浜の漁人が海に出ている時、その妻（め）とまぐわった」

思わず眼を向けた皇子に、小楯は誘いかけるように笑った。

「女とまぐわうは快。その快を、皇子と共にしたい」

翌日――。

磯に近い苫屋で、三人の裸身の躯（からだ）がうごめいていた。

女は、犬のように両膝と両手を地につき、尻を突き出して喘いでいた。小楯は、雄々しく勃（た）った陽物を、女の陰（ほと）に差し込み、腰を動かしていた。

「皇子よ」

四つん這いになった女の胸から、瓜のような乳房が垂れていた。腰を動かして女を犯しつつ、右手をのばして胸乳を弄びながら小楯は、女を犯しながら、小楯は言った。

「触れてみられよ」

皇子はおずおずと手を延ばし、女の乳首にそっと触れた。触れた時、女は身をのけぞらせ、小さく叫んだ。

思わず手を引っ込めた皇子に、小楯は笑いながら言った。

「もっと、いたぶるように」

女の貌が、苦痛を受けるように歪み、時に小さな悲鳴をあげていた。

「この女は、いたぶられるのを喜ぶ」

小盾は言いつつ、手を伸ばして皇子の股間に触れた。柔らかく萎縮したそれをつかみ、

「やれ、皇子は未だ、精を漏らしたもうたこともないのか」

と笑った。激しく首を振る皇子に、小盾は重ねて、袴（ズボン）を脱がれよ、と言った。

小盾の命ずるままに、女の貌に股間を寄せた。女はむさぼるように、白く小さな皇子の陽物をくわえ、舌で嬲った。
「巧みであろ」
小盾は、頬を紅潮させ、眼をつむり、息を荒げる皇子を見て得意げだった。
「吾が仕込んだ」
やがて、皇子は女の口のなかに、欲望のたぎりを迸らせた。

その日、磯臭い苫屋で皇子がなしたのは、それだけだった。
苫屋の隅に膝を抱えて座り込んだ皇子を尻目に、小楯は、女を犬のように扱った。精を漏らし、濡れた陽物を舐めさせた。別れ際、女は小楯の胸に貌を埋め、名残おしげにその肩や腰にしがみついた。
「皇子よ」
苫屋を出で、浜風に吹かれながら、小楯は言った。
「吾は、この伊勢の海部の長の子。故に、女どもはすべて、吾とまぐわうを喜ぶ」
足下に寄せては返す波飛沫を見つめながら、皇子は何も言わなかった。
「女は、位ある男とまぐわいたがる。皇子は、飛鳥の大王家の血を受けた者。さきほどの女には告げなかったが、それを知れば、女どもは喜んで、皇子に身を捧げ奉る」
その傲岸な物言いに、皇子はかすかな嫌悪を覚えた。
「だが……」

皇子は、人に抗う時、喉が乾き、声がかすれる。
「あの女には、夫がいるのであろう」
「然り、その夫は知っている。知っていて、吾とかの女がまぐわうを喜んでいる」
「何故？」
「かの女が孕めば」
貌を顰める皇子に気づかぬように、小楯は言った。
「あの女と夫は、海部の一族に連なる。吾らが家の財のおこぼれにあずかる」
砂浜はやがて途切れ、磯となった。黒く尖った突起の目立つ岩が、白い波に洗われている。小楯は続けた。
「民に生まれた男どもは、美まし女どもを争う。吾ら、位のある家に生まれた者は、争わずとも、女は喜んで吾らとまぐわう。まして、皇子は、飛鳥の大王家の子。吾とまぐわうより、女どもは皇子とまぐわうを、より喜ぶ」
皇子とはいえ、飛鳥の都から遠き伊勢に捨て置かれ、訪う宮処人さえおらぬ身ではないか……。
「皇子は」
小楯は、大海人皇子の屈託など気づきもせず、続けた。
「この近くの、洞（ほら）の乙女のことを知りたもうか」
「洞の乙女？」
「あれを」

小楯が指さす先は、砂浜が切り立つ崖に遮(さえぎ)られて途切れ、険しい崖を登った先は、丈の低い樹木が茂っていた。崖の麓に標縄(しめなわ)が張られ、人の立ち入りを禁じている。

「あの崖の頂きは、洞になっている。そこに、盲(めしい)いた媼(おうな)と乙女が住む。見た者は希だが、煌々(きらきら)しく美まし乙女であると聞いた」

小楯は、かすかに舌を出し、唇をなめた。

「三日の後、かの乙女を姦す。皇子も、共に」

掌で肩を掴まれ、皇子は貌を強張らせて小楯を見つめた。

まだ明けきらぬ空に星が輝き、青い闇が天地を覆い、寄せては砕ける波の音のみが、暗い磯に木霊(こだま)していた。

「縄を」

標縄を乗り越え、崖の麓に立った小盾が、背後に立つ二人の伴部(ともべ)を見た。ともに小盾よりやや年かさか。すでに薄く髭を伸ばした伴部が、長い荒縄を輪に束ねて肩にかけ、崖をよじ登りはじめた。ところどころの岩の突起や、突き出した松の幹に縄を結び、やがて崖の頂にたどり着き、手を振って合図を送った。

小盾は、頂より垂れ下がった縄を引っ張り、丈夫に結わえてあることを確かめた後、残る伴部と、大海人皇子の貌を見比べた。

「汝より行け」

小盾に促され、伴部はうなずき、縄をつかんで登り始めた。

「彼等は山の生まれ故、慣れている」

不安な面持ちで崖を見上げる皇子の肩に、小盾は手を置いた。

「あの伴部が登り終えれば、次は皇子が行かれよ」

皇子は、眼をしばたたき、振り返って背後の標縄を見た。禁忌を侵した後ろめたさが、彼を逡巡させていた。

「もし落ちれば、下で吾が受け止め奉る」

小盾は哄笑し、分厚い手のひらで皇子の背を叩いた。

四人の男どもは、むろん崖の上の洞に住むという乙女を姦すため、早朝、未だ漁人どもも目覚めぬ前、人けのない刻を見計らってやってきた。

――何故に四人で？

と問うた皇子に、小盾は軽く舌を舐めて応えた。

――盲いた媼(おうな)というても、まだ三十路との噂もある。なれば、その媼もともに姦す。抗う女を姦すには、二人がかりで押さえつければ、たやすい。故に、四人で行く。

崖を登りながら、皇子は自問した。

何故に、小盾の誘いを拒まなかったのか？

応えは決まっていた。

朗らかで屈託のない小盾に、鬱屈した皇子は常より気圧(けお)され逆らえなかったといだけではない。あの漁人の妻の口に精を迸(ほとばし)らせた時から、皇子は、新たに芽生えた肉(ししむら)の欲に責め苛まれてい

た。美まし乙女とまぐわうことを、確かに皇子は欲していた。そういう己を嫌悪しつつも、気のたかぶりを抑えつけることはできなかった。
やっと崖の頂に辿り着いた時、二人の伴部が、松の根方に腰を下ろし、下卑た面持ちで語り合っていた。皇子の姿に、伴部どもは口を噤んで拝礼し、それから身を乗り出して崖下の小盾に合図を送った。
彼等の袴は、すでに堅く勃った陽物の痕跡を見せていた。
それを眼にしたとき、皇子は意を決した。

「ここか」
崖の頂に生い茂る松林を抜けると、人が十人ほど立てる平らな岩場を前にして、洞窟が海に向かって開いていた。岩場の先は、断崖絶壁が海に向かって垂直に切り立っており、はるか真下の荒磯に波が白く砕け散っている。
「明けてしまったな」
小盾はつぶやいた。
空が茜色に染まり、東海の彼方より日輪が姿を現し始めている。
「帰りを見られてはまずい。暗くなるまでここで女どもを姦そう。食い物や水は持ってこなかったが、洞のなかに、女どもの蓄えがあるだろう」
言いつつ歩き出した小盾の前に、大海人皇子が、洞窟を背にして立ちふさがった。
「皇子よ、如何された」

「吾は……」
皇子は、息を大きく吸い込み、吐き出すように言った。
「せぬ」
「せぬ？」
「洞の女どもを、姦さぬ」
小盾は口を開け、まじまじと皇子を見つめ、背後の伴部どもを振り返った。
「臆したもうたか」
「臆しはせぬ」
皇子は頬を紅く染め、肩で息をしながら言った。
「四人で二人の女を無理強いに姦すのは、人倫に悖（もと）る」
小盾は哄笑した。
「皇子は、百済渡りの仏とやらの経典でも読みたもうたか。それとも、儒者の言に惑わされたもうたか」
飛鳥の都では、すでに数十年以前より、仏教や儒教が、唐や百済からもたらされ、壮麗な寺院の伽藍（がらん）が建ち並び、儒を講じる博士も渡来してきていた。
「吾等、高い位にある者は、できうるかぎり多くの女とまぐわい、子をなすが務めぞ。人倫の道など、精の枯れた老人の慰みにすぎぬ。皇子が女どもを姦したまわぬというならば、それもよし、隅で見ていられよ」
動こうとしない皇子に、小盾は笑いをおさめ、二の腕をつかんで道を明けさせようとした。皇

子は抗い、小盾の胸ぐらをつかんだ。
「皇子！」
我を忘れた小盾が拳を固め、振り上げた瞬間、皇子の貌が苦しげに歪み、胸ぐらを掴んだ手の力が抜け、萎れた布のように、地に膝を突き、背を丸めた。
その背後に、ひとりの乙女が立っていた。
「皇子！」
小盾は狼狽え、膝を突いて皇子の貌を覗き込んだ。
「如何された？」
皇子は、ぎゅっと眼をつむり、右手で股間を押さえていた。脂汗が滝のように滴り落ちていた。
「まさか汝は……」
小盾は、立ち上がり、乙女に歩み寄った。
「大和の大王家に連なる皇子のふぐりを蹴ったか」
小楯の右手が、腰に提げた剣にかかった。
「小楯、やめよ！」
皇子が叫んだ。うずくまったまま上半身をよじり、小盾と乙女を見つめて叫んだ。
「まだ、女童ではないか」
年の頃は十か十一か。急所の痛みに涙が止まらず、そのすがたかたちは朧にしか見えないが、小枝のように細い胴に、藁しべのような手足、小楯の顎くらいしかない背丈は、彼女が、いまだ

男を迎え入れるまでには育っていない、硬い蕾であることは明らかだった。
「女童とはいえ、皇子を害し奉らんとした逆賊」
小楯は、二人の伴部に合図した。二人は、皇子を抱き起こし、離れた松の根方に運んで寝かせた。
「赦すわけにはゆかぬ」
小楯と伴部どもは、洞窟を背にした乙女を囲み、ゆっくりと輪を縮めるように歩み寄った。乙女は、じりじりと後ずさりした。
「小楯！」
皇子は叫ぼうとして身を動かし、激しい痛みに呻いた。
何も出来ぬ……。
皇子は、己が身の弱さを呪った。
ただ、見ているしかないのか……。
不意に、乙女が身を屈めた。次の瞬間、一人の伴部が腰を折って呻いた。
乙女は、伴部の股間を拳で打ったのだ。
男どもの眼が、岩場に膝を突いた伴部に注がれた時、乙女は背を伸ばし、右の腕を伸ばした。突き出された二本の指が、もう一人の伴部の両眼に深々と突き刺さった。
伴部は絶叫した。貌を両手で覆った。その指の隙間から血が噴き出した。
「汝は、抗うか！」
小楯が剣を抜いた。振り下ろされた剣を乙女は敏捷に避け、脚を上げた。爪先が驚くほど高く

上がり、小楯の手首を蹴った。剣が宙を舞い、岩場に落ちた。
そのとき、股間を拳で突かれた伴部が、背後から乙女に抱きついた。脇から両手を差し入れて羽交い締めにした。
「し得たり！」
小楯は、乙女の喉を掴んだ。乙女は、膝を上げ、小楯の股間を蹴り上げた。小楯は両手で股間を押さえ、苦痛に呻き、しゃがみこんだ。
乙女はさらに、足を後ろに蹴上げた。踵が伴部の急所を打った。伴部はのけぞり、乙女を離して左右の手で股間を庇った。その鼻柱に、乙女は己が頭頂を打ち付けた。鼻柱を砕かれ、伴部は両手で貌を覆った。乙女はさらに、伴部の股間を蹴った。伴部は血反吐をはき、白眼を剥いてくずおれた。
両眼を潰された伴部は、右手で血が滴る貌を押さえ、左手を突き出し、光を求めるようによろばい歩いた。岩場の端までさまよい、悲痛な叫びを残して海に落ちた。
小楯は、股間を右手で抑え、涙を滝のように流し、恐怖の呻きを発しながら、尻を突き出して這って逃れようとした。乙女は、その尻を蹴った。岩場にうつぶせになった小楯の髪をつかみ、仰向けにした。その腹にまたがり、両手で左右のふぐりをつかんだ。
小楯は海老反りになって泣き喚いた。乙女は容赦なく、両手に力をこめた。やがて小楯の躯が硬直し、血反吐をはき、動かなくなった。袴が、みるみる鮮血に染まった。
乙女は立ち上がり、身構えたまま、獣のように四囲を見回した。その眼に、松の根方で呆然と身を固くした大海人皇子の姿が映った。

乙女はゆっくりと皇子に歩み寄った。皇子は、恐怖に震えながら、何もできなかった。乙女が、皇子の胸ぐらをつかんだ。皇子は、初めて乙女を、まざまざと、見た。
乙女は、わずかに腰に白布を巻いただけだった。平らな胸が、乙女の稚さを示していた。
肩のあたりで切った黒い髪が、貌の半ばを覆っていた。その黒い大きな瞳が、炎のように燃えていた。整った鼻梁。引き締められた唇。かたちのよい白い貌。
美まし……。
皇子は、乙女の美しさに魅入られたように、何も出来なかった。急所を蹴られた苦痛だけではない。力技では叶うことのなかった三人を、瞬時に打ち倒した乙女に、気は萎えきっていた。
殺される……。
胸ぐらをつかんだ乙女の手に力がこめられた。
何故、標縄を越えて禁忌の血に足を踏み入れる前に、小楯を止められなかったのか。
何故、肉の欲を抑えられなかったのか。
皇子は眼を閉じた。そのとき、
「亜那！」
洞窟の中より声がした。
乙女は、眼をよじって洞窟に眼を向けた。一人の女が立っていた。

女は、年の頃は三十くらいか。粗末な貫頭衣でくるぶしまで覆い、腰まである長い髪、瞼は閉じられているが、高い鼻や厚い唇、濃く長い孤を描く眉は、かつての美貌を窺わせていた。

「その男は、汝を救おうとした」
女は、亜那と呼ばれた乙女の肩に手を乗せた。
「殺してはならぬ」
亜那は、皇子の胸から手を離し、立ち上がった。忘れていた股間の痛みが、蘇った。皇子は、両手を脚の付け根に差し込み、身を折った。
女は、皇子の傍らに立ち、静かに問うた。
「汝はまことに、大王が家の皇子か？」
皇子は僅かに顎を動かして応えた。女は、片膝を突いて、手を延ばし、皇子の貌に触れた。かたちを確かめるように、女の手が動いた。
不意に、女は身をのけぞらせた。総身が痙攣し、開いた唇から、文字にできない呻きが漏れた。
皇子は怯えた。神懸かりした巫女を見るのは初めてだった。
「汝は……」
女は、仰向けに岩場に倒れ、叫んだ。
「やがて、日輪の女神の国を、継ぐ者……」

日輪の女神の国。
その言葉を、大海人皇子は、幾度も幾度も反芻した。
日輪の女神。
大和の大王は、神の末裔とされていたが、それがいかなる神なるかを、大海人皇子は知らない。

皇子は洞窟で盲いた女と亜那なる乙女に介抱され、日が落ちる前に、海部の邸の内に建てられた宮に戻った。海部の長に問われ、皇子は、盲いた女に言われたまま、こう応えた。
標縄を越えて禁忌の崖に足を踏み入れた小楯を、皇子は止めた。標縄を越えぬまま、皇子は独り待った。標縄を越え、崖をよじ登った三人は、日が西の山に没するまで帰らなかった。皇子は、なす術なく、海部の邸に戻るしかなかった……。
数日後、三人の屍が浜に打ち上げられた。海部の一族は、おおぜいの哭女を随え、盛大な弔いの儀式を行った。むごたらしく傷つけられた三人の屍に、ひとびとは、禁忌を侵した者に下される神罰の厳しさを思った。
やがて、海部の者さえ三人のことを口にしなくなった頃、大海人皇子は、独り、炊いた米や干し魚、木の実を瓶に入れて背負い、そっと海部の邸を抜け出し、標縄を越え、崖をよじ登り、かの洞窟に向かった。
皇子を眼にした亜那は、山犬のように警戒を解かなかったが、盲いた女は、嬉しげに瓶の食を受け取った。
以後、皇子は、しばしば米や山菜、木の実、魚介や獣肉を携え、崖の洞窟を訪なった。なかなか警戒を解かなかった亜那も、やがて、皇子が姿を現す度に、貌をほころばせるようになった。
皇子が、洞窟の女たちと言葉を交わすことはなかった。瓶の食料を差し出すと、皇子はすぐに崖を降りた。
何故に、と問われて、確たる応えがあったわけではない。ただ、亜那という名の乙女の、笑んだ貌を見たい。それだけが希みと言えば希みだった。

ある日、朝餉を終えた皇子は、海部の邸の一隅に建てられた、小さな宮の庭に面した縁で、飛鳥より届けられた木簡を拡げていた。すでに大和には、隋より紙がもたらされていたが、飛鳥の王族や高い位にある官のみが僅かに使うだけで、都より離れた伊勢で文字を記すのは、木を平らに削った木簡しかなかった。

木簡には、かつて大和の国を興した飯豊なる女王が作られたという、十七条のが記してあった。

――一曰く、和を以て貴しとし、忤うこと無きを宗と為せよ。

争わず、逆らわず……。

それ故に、小楯が言うたように、伊勢の女どもは、位高き男に、身を捧げるのか。

ならば、亜那という洞の乙女のように、海部の長の子に抗い、逆らい、ついにはそのふぐりを砕き、海に投げ捨てた者は、国の法を破る罪人なのか……？

しばし空を見つめて物思いに耽る皇子の耳に、庭の茂みががさりと立てた音が飛び込んできた。音のした方に眼をやると、小さな細い躯が、迷い込んだ獣のように、こちらを窺っていた。

「亜那！」

皇子は思わず叫び、四囲を見回した。伴部の姿は見えず、皇子は一息つき、庭に飛び降りた。

亜那は、新しく調えたらしい膝までの白い貫頭衣をまとい、白く細い腕や足も露わに、恥ずかしげに笑みを浮かべつつ、皇子を見つめていた。

「何故に、ここに来た」

皇子の問いに応えず、亜那は、肩を竦め、俯いている。

「まさか……」

皇子は、庭を囲む柵を見回した。柵の外は数名の兵が守っている。さらにその外の、海部の邸は、剣や矛を携えた大勢の兵がいる。皇子の脳裡に、一瞬で小楯や伴部どもを打ち倒した亜那の姿が蘇った。

「誰にも見られなかった」

亜那は、皇子の思いを察したかのように叫んだ。

「皇子に会いたかった。だから、来た」

皇子は、まざまざと、亜那を見つめた。頬を赤らめ、恥じらうように眼をそらし、唇を引き結んだ亜那の腹が、音を立てた。

「何か、食べたいのか？」

皇子の問いに、亜那はますます顎を引き、そっと上目遣いに皇子を見た。聞き分けのない童のような風情に、皇子は微笑んだ。

「米を食いたいか」

亜那は貌を上げ、大きく頷き、それからはっとしたように、貌を背けた。

米を口に入れることができる者は、この伊勢では限られている。

「米は……うまいか」

「甘い！」

亜那は、両手を握りしめて叫んだ。

「甘いか」

皇子は微笑み、うなずいた。
「厨にはまだ、炊いた米が残っているはず。運ばせよう」

亜那はそれからも、しばしば海部の邸に現れた。その都度、皇子は米を食わせ、また、みやげとして持たせて帰した。
「阿礼が喜ぶ」
腰に下げた麻の袋に、米を入れながら、亜那は嬉しげに言った。
「阿礼？」
「吾が養い親」
かの盲いた女の名であった。
「阿礼は、なんでも知っている。伊勢のこと、伊勢の外のこと。知っていることを、吾に教えてくれる」
亜那は、崖の上の洞窟しか見たことがなかった。時に崖を折り、魚や貝、海草を拾うばかりだった。だが、伊勢の外の世界について、亜那は大海人皇子よりも詳しく知っていた。
大和は、伊勢より山を越えた飛鳥を都とし、越、吉備、出雲、筑紫、伊予らの諸国を随えている。さらに海を越えた隋や百済と交易し、珍しい産物や、仏や儒の経典を手に入れ、栄えている。その大和を統べるのは、宝という名の女王……。

半年が過ぎた。いつしか、亜那は、皇子の宮に住みついていた。

「阿礼は、承知しているのか」
幾日を経ても洞窟に帰ろうとしない亜那に問うと、
「阿礼が言った。皇子の宮に住め、と」
と応えた。
しかし……、皇子は口ごもった。阿礼は、盲いている。誰が、魚や貝を拾い、阿礼に喰わせるのか。
「阿礼は、眼は見えずとも、独りで崖を登り降りし、貝や海草を拾う。故に吾を、皇子とともに住め、と命じた」
亜那は、遠い眼差しを海の方に向けつつ応えた。
「いずれ日輪の女神の国を継ぐ皇子のもとで暮らせ、と」

大海人皇子は、いずくの生まれとも知らぬ賤の乙女を拾い、宮に住まわせている……。
海部のひとびとは密やかに言い合い、海部の長は男女の情交に疎い皇子が、やっと妾を抱えたか、と喜んだ。その妾と男女のまぐわいを覚えた後、やがて、海部の乙女と睦ませ、大王が家の血を引く子をもうけさせる。それが海部の長の希みだった。
だが、皇子は、亜那とまぐわう気はなかった。亜那が阿礼から教えられた、外の世界のさまざまの事どもを聞くのが、何よりの楽しみだった。
やがて、亜那の語りを聞きに、幾人かの若者が、皇子の宮を訪なうようになった。なかでも、特に親しくなったのは、海部の一族である石床、山中の猟人を束ねる、東の濃の国から流れてき

て伊勢に住み着いた村国男依、という面々だった。
新たに友を得て、皇子の宮は賑やかだった。そのざわめきの中心に、穏やかな笑みを浮かべ、様々な国の言い伝えを、大和の来し方を、流麗に語る亜那がいた。
亜那は、もはや洞窟に住んでいた頃の、か細い乙女ではなかった。背が伸び、胸が膨らみ、腕や脚にふくよかに肉が乗り、ふっくらとした白い頬が、くっきりと鮮やかな貌だちを引き立てた。
「日輪の女神の御姿を見せよう」
と亜那が言い出したのは、朴本大国が、山でとれた雉を三羽さげて宮に現れ、ささやかな宴が開かれた夜だった。
やがて、日輪の女神の国を継ぐ者……。
神懸かった阿礼の言葉が、大海人皇子の胸に蘇り、木霊した。海部石床が問うた。
「日輪の女神とは……天照のことか?」
亜那はうなずいた。天照とは？　男依や大国が口々に問い、五十鈴川で漁をする民が崇み奉る神だ、と説明する石床に、亜那は口をはさんだ。
「天なる高天原（たかまがはら）よりこの地に降り立ち、国を開いた神」
そんな話は聞いたこともない、という男どもに、亜那は語り始めた。涼やかな美しい声音で紡ぎ出される物語に、いつしか男どもは聞き入った。
天地分かれてのち、二柱の神が生まれいでき。一柱を伊邪那岐、一柱を伊邪那美。二柱の神が天日鉾で国を造りたまいて後、さらに二柱の神生みたまいき。一柱は姉なる天照、一柱は弟なる素戔嗚……。

いつしか、亜那は立ち上がり、ものに憑かれたように、神がそこにいますかのように、身振り手振りを交えて語り始めた。
……伊邪那美の神、黄泉の国に崩御たまいて後、素戔嗚、嘆き悲しみて、啼きたまいき。その啼きたまえるさまは、青山は枯れ、河の水は溢れし。ついには、天照が田の畦を壊ち、その溝を埋め……。
母なる伊邪那美の死に、素戔嗚は号泣し、山は枯れ、大水となり、ついに姉なる天照の田の畦を壊し、溝を埋めた。素戔嗚の乱行に、天照の女神は憤り、ついに天の岩戸にお隠れになった。日輪の女神がお隠れになったことで、世界は闇に閉ざされ、疫病が流行った。
神々は談合し、一策を案じた。岩戸の前に集まり、木桶を裏返して鼓となし、打ち鳴らして騒いだ。ここに、天宇受女なる者、足を踏みならして踊り、衣をはだけ、その胸乳と陰を見せた。神々はどっと笑った。
「天照の女神は、岩戸の外の騒がしさを怪しみ、戸を細く開け、問いたもうた。何故に神々は、笑っているのか、と。天宇受女は応えた。諸々の神は、女神よりも尊いお方のお出ましを喜んでいる、と。女神は、さらに岩戸を開き、その尊い者を見ようとされた。一柱の神が、鏡を差し出した。女神は、鏡に映る己が貌に驚き、さらに身を乗り出された。そのとき、手力男の神、女神の手を取り、岩戸より出だし奉った。再び天地に日輪の光が溢れ輝いた……」
神々は、喜びの歌をうたった。

あはれ

あな面白
あな愉し
あな清明
をけ

亜那は、素戔嗚のように荒れ狂い、天宇受女のように踊り、鏡に映る己に驚いた天照のように立ちすくみ、やがてゆっくりと腰をおろした。
「見事なるかな」
海部石床が叫び、村国男依と朴本大国は手を打って囃した。亜那は、憑きものが落ちたように微笑み、男どもに拝礼した。
「男依よ」
石床がからかった。
「汝は、いずくかの女が家に通うていたな。女は恐ろしい。怒らせると、戸を開けてもらえぬかもしれぬぞ」
「戸を閉められれば」
大国が言葉を添えた。
「亜那に踊ってもらおう」
「否」
男依が応えた。

「勾玉のひとつも贈ればよい」
男どもは哄笑し、亜那はにこにこと、男どもを眺めていた。
ただ独り、大海人皇子のみが、食い入るように亜那を見つめていた。
日輪の女神。日輪の女神が開いた王国を継ぐ者……。
亜那は、皇子の眼差しに気づいた。その頬が、あかく火照っていた。
「皇子よ」
亜那が立ち上がった。
「やがて夜が明ける。皇子に、日輪の女神の御姿を見せたい」
「日輪の女神の？」
大海人皇子は、眼を見開いた。亜那は微笑み、頷いた。
「然り。浜へ出よう」

闇が薄れ、空は茜色に染まり始めていた。
大海人皇子の宮からしばし馬を走らせた二見の浦。波打ち際に立つ皇子と亜那、そして三人の男どもは、沖の海原から突き出した、二つの大岩を見つめていた。
「あの岩より出でますのか？」
村国男依が問うた。
「日輪の女神が」
「しばし、待て」

亜那は砂浜に腰をおろし、波に打ち上げられた巻き貝を拾っていた。
「女神は今、隠れている。だが、やがて天地(あめつち)の狭間に生きとし生ける者すべてのために、出(い)で来たまう」
やがて、黒々と聳(そび)える二つの岩の狭間がきらりと光った。
岩間からのぞく波間より、太陽の光の輪が現れ、雲間をあかく照らし、海原を白く染めた。
荘厳な光景に、男どもは眼を見張った。亜那が立ち上がり、ゆっくりと歩み、波間に足を浸した。
男どもの視界に、太陽の光を浴びる亜那の、しなやかな四肢が、黒い影となって浮かび上がった。
その後ろ姿に、海部石床、村国男依、朴本大国は膝を突いた。
「神(かむ)さびてある……」
海を知らぬ山育ちの大国が呟き、他の二人も和した。
「すなわち伊勢は」
石床が呻いた。
「常に、日輪の女神の出でます地ということか」

その日の昼下がり、皇子と亜那が宮に戻ると、飛鳥の都に赴く海部の者に頼んでおいた経典が届いていた。亜那は、字を読むことができた。
肩を寄せ合い、紙に書かれた経文を読むうち、皇子の肘が、豊かに実りを見せ始めた亜那の胸

二見浦（三重県二見町）

乳に触れた。互いに眼を合わせた。亜那の瞳が戸惑いと、かすかな潤みを見せていた。知らず知らず、皇子は彼女の肩を抱いていた。

肌の暖かさと、胸の鼓動が伝わってきた。皇子は、久しぶりに高ぶりを覚え、亜那の腰に手を回した。

不意に、皇子はかすかな痛みを、股間に覚えた。亜那の右手が、皇子のふぐりを軽く掴んでいた。

見れば、亜那はゆっくりと首を横に振り、微笑んでいた。瞳が切なげに、皇子を見つめていた。

「日輪の女神は……」

皇子は声をかすらせた。

「あまねく天地を照らし、五穀を草木を実らせ、人に恵みをもたらす」

「然り」

亜那は頷き、眼を細めて皇子を見上げた。

「吾が、大王となれば……そのような国を造れ、と……否、吾が日輪のごとく、民を慈しめ、そう阿礼は言いたかったのか」

亜那は応えず、皇子の肩に頭(こうべ)を乗せた。

しばし、二人は身を寄せ合い、しかし、何もしなかった。